



Title	宮岡先生を悼んで
Author(s)	風間, 伸次郎
Description	特別企画：追悼 宮岡伯人先生
Citation	北方言語研究, 16, 45-55
Issue Date	2026-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99334
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99334
Type	other
File Information	04_Kazama.pdf



【特別企画：追悼 宮岡伯人先生】

宮岡先生を悼んで

風 間 伸 次 郎
(東京外国語大学)

1. まえがき

人間、生まれた場所と親は選べない、と言う。生まれた時も選べないだろう。オレはサピアに何か訊いてみることはできないし、2100年の言語学がどうなっているかを知ることもしない。60年ほど生きて来て、最近やっと少しそのことの意味が分かって来た。宮岡先生はオレの約30歳上、先生とオレが同じ時空間で密に過ごしたのは1987-1992の足掛け6年間である。オレにとっては大学4年から修士4年まで、先生にとっては51-56歳の時ということになる。この文に描かれた先生はその期間に、ある視点（風間の視点）から見たことが中心であり、この壮大な人物のお姿の一端を記したものでしかない。「妥協を許さない」先生の姿勢について、不謹慎な言葉を使っているとお叱りを受ける箇所も多々あるだろう。もとよりこれを書くべき者は間違いなくオレ以外であるべきだが、何の因果かこうなった。その原因は一つにはオレがこの「怒れる神」からある程度離れたところにいたからであり、二つ目にはオレが野球部出身で理不尽な(?) お怒りには慣れっこだったからではないかと思う。古い記憶には思い違いもあると思うが、関係諸氏におかれては何卒御容赦願いたい。何一つ先生への恩返しになる文ではないが、ただ先生のことを後世に伝えたいという一心から書く。今思うことは、先生の魂が今もいろいろな人の心の中に生きているということだ。なお本文中には敬称略をはじめ不統一があるが、他意はないのでこれも御容赦されたい。

2. 先生の略歴

先生は1936年神戸生まれ、1959年(23歳)大阪外国語大学卒業(英語学)、1963年(27歳)京都大学大学院修士課程修了(言語学)、1965年(29歳)博士満期退学・小樽商科大学商学部助手、67年助教授(31歳)、1982年(46歳)東京外国語大学外国語学部教授、1987年(51歳)北海道大学文学部教授、1994年(58歳)京都大学文学部・文学研究科教授、名誉教授、2000年(64歳)大阪学院大学情報学部教授、2007年退職である。

『エスキモーの言語と文化』の奥付には、1967-69年アラスカ大学助教授、1971年より北海道大学文学部講師を兼任、1977年4月よりアラスカ大学クスコクウィム分校でエスキモー語研究に従事、とある。

主だった編著書を出版年と共に見て行くと、1978年(42歳)『エスキモーの言語と文化』弘文堂選書、1987年(51歳)『エスキモー 極北の文化誌』岩波新書364(サントリー学芸賞受賞)、1992年(56歳)『北の言語 類型と歴史』三省堂、1996年(60歳)『言語人類学を学ぶ人のために』世界思想社、2002年(66歳)『「語」とはなにか エスキモー語から日本語をみる』三省堂・『消滅の危機に瀕した世界の言語』明石書店、2007年(71歳) *The Vanishing Languages of the Pacific Rim*. OUP、2012年(76歳) *A grammar of Central Alaskan*

Yupik (CAY) (Vol. 58, 全 1658 ページ). Walter de Gruyter, 2015 年 (79 歳)『「語」とはなに
か・再考 日本語文法と「文字の陥穽」』三省堂、となろう。あとでみる「科研」は 1999-2003
で、63-67 歳ということになる。

なぜいちいち年齢まで記したかという、読者と共に「この歳まで自分は何をしてきた
のか、今、何をしているのか、今後は何ができるのか」を考えたかったからである。人にも
よるのかもしれないが、文系の研究者にとっての集大成は 60 歳過ぎか!?, と思うと励ま
される気にもなる。「それは先生だからだよ」と言われれば、そうであるような気もする。

先生はどうしてこの道に入られたのだろうか? 『エスキモーの言語と文化』の「あとが
き」にはこのように書かれている。

… E. サピアの著作に魅かれ、構造的にさまざまな特異性を示す新大陸の言語
のうち、手はじめにアルゴンキアン系言語の文法を読みかけていた私にエスキ
モー語を勉強してはとお勧めくださったのは、大阪外国語大学の研究室で偶々
お目にかかった高橋盛孝先生である。1959 年秋のことと記憶している。

学生時代から今日にいたるまで、直接的にあるいは御著書を通じて、泉井久之
助先生からは、つねにもっとも大きな恩恵と強い励ましをうけることができた。
日本ではどうも見ることもできなかった数々の文献を利用することができた
のは服部建先生と池上二良先生のおかげである。両先生からはことあるごとに
具体的な問題について懇切な御教示をいただき、拙書の準備にさいしても池上
先生はお忙しいなかをその原稿の約半分の部分について有益な示唆を与えてく
だされた。

岡正雄先生ならびに先生を中心に組織された明治大学アラスカ学術調査団の
祖父江孝男、蒲生正男、岡田宏明の諸先生には、私にも参加の許された 1967 年
の現地調査このかた、多岐にわたるご指導をいただいている。弘文堂が小著の出
版を計画されたのも、祖父江先生の慫慂があつてのこととつかうがっている。

泉井先生の影響、というのはどれほどのものだったのだろうか? 宮岡先生の著書を見て
いても直接泉井先生を引用している箇所はなかなか見当たらない。『言語学大辞典 第 6 卷
術語編』の「言語人類学」の項目は明らかに先生のものだが、「言語民族学」をわが国で
踏襲した泉井久之助 (1947)『言語民族学』(新学芸叢書 4, 秋田屋)は、言語による民族の
画定、民族の測定 (社会史的文化史的画定と進化の方向・程度の測定)、民族政策をその課
題に含めている」(p. 417) とある。唯一見つけたのはこれだ。やはりサピアの訳書の影響
が大きかったに違いない。先生がよく「泉井先生の『ヨーロッパの言語』(岩波新書 699)
はええねえ、古本屋でよい本があつたらぜひ教えてほしい」と言っていたのを覚えている。
買ったけどちゃんと読んでいない。今、本棚から取り出して立ち読みしてもなるほどいい
本だ。高橋盛孝『北方諸言語概説』も、網走でコピーして製本したのがある。こちらも今
見てもなかなかの本で、時間を見つけて読みたいなあと思う。

オレらが参加した北方言語研究者協議会 (1990 年 5 月) は第 2 回である。第 1 回は 1965
年 9 月 4-5 日 (オレの生まれた年であることに深い縁を感じる) で、先生は「エスキモー
語における音位転倒について」という題で発表している。参加者は池上二良、高橋盛孝、

Robert Austerlitz、田村すず子、山田秀三である。

なんと先生は南米の南端のヤーガン語を調査したことがある(1973年)。『言語学大辞典』の「ヤーガン語」も執筆されている。そこにはエスキモー語とヤーガン語の類似性を指摘し同系の可能性を示唆した研究者もあったと書かれている。「エクメーネ(人類が居住する地)の最南端の言語に興味があつてね」と聞いたような気がする。いやはや、極端な好みであることよ。

3. 先生の生い立ちと好み

私には先生の幼い頃や若い頃のことは何もわからない。お話を伺ったこともない。唯一、お父様に関して『「語」とは何か』の「あとがき」には次のような情報がある。

私事におよぶことだが、いつの頃からか、父の書斎の一冊の本がそれとなく目をひいていた。万葉集に傾いた国文学関係の本に埋もれた唯一の国語学書、山田孝雄著『日本文法論』である。ドイツ語や英語の引用文には丁寧に訳語が書き込まれている。みずから指揮した京都刑務所襲撃事件(昭和5年10月)とその後の官憲の追及にまつわる過去の影から逃れるように深夜繙いていたのかもしれないこの一冊に老来、引きもどされた縁の糸を思わざるをえない。

先生がわざわざ書いているのだから、書き残したいことだったのだと思う(検索するとお父様のお名前は出てくる)。

生まれた神戸や関西には強い想いがあつたのだろう。上記のあとがきにも出てくるが好きな作家は田辺聖子で「おせいさんはええねえ〜」とおっしゃっていた。ちょっと読んでみたが、オレにはさっぱり良さがわからなかった。仲が良かったのは北大文学部棟の一つ上の階にいらした人類学の煎本先生で、神戸生まれである。ずっと仲の良かった崎山理先生も大阪出身である。こうした関西出身の文化人(?)の先生方は一見人当たりが良いがなかなかにはっきりものをおっしゃらないタイプの方々だった。一方、宮岡先生はもっと過激で喜怒哀楽がお顔にそのままに現れるタイプだったと思う。

一度飲んでいた時、「「ほっけ」っておいしいですよねえ」と言ったら先生は「わたしはこういう大味な魚はどうもね」とおっしゃった。先生が小樽のある有名な鮭屋に行った時の話である(ある先輩に聞いた話だ)。一口食べると先生はぐるぐると鮭に醤油をかけ「XX屋さんともあろうものが!」と言い残して帰ってしまったそうだ。調査に同行した某先生によれば、宮岡先生は味噌でも海苔でも日本の食料を滞在期間分持って行って、現地のものなど口にしないという。オレは日本の食べ物など現地に持って行ったことはないので、なかなか驚いたものである。

何事も中途半端で済ますような性格ではないので、お酒も飲めば相当に召し上がったように思う。一時期は脾臓が悪いと聞いたので、不謹慎にも永くはないんじゃないかと思った。タバコはパイプで、我々はあのチョコレートのような甘い香りが漂ってくると「先生が来たぞ」と戦々恐々としたものである。

4. 先生と英語と漢字

サピアの英文は格調高く、明晰にしても長くて複雑な文が多い。大阪外大で英語を専攻

していた先生が魅かれていったわけである。『英文標準問題精講』という有名な受験参考書があった。一番最後に載っている最難関の文章はサピアのものだが、「XX 年小樽商大」の入試問題とある。誰が出題したかは明らかであろう。

先生は凝った漢字もお好きだった。「風間さん、この蝟集の「蝟」いうのんは何でっか？」(竹内君)「そりゃおめえ、タコだろ」(暫時)「ハリネズミやいうて書いてありますけど」「えっ！」それから「言語の蝟集」を目にするたび心に浮かぶはハリネズミである。賢明なる読者諸氏のために漢字の読みテストを課しておく：1. 幻戯、2. 囂しい、3. 粗笨の誹り、4. 瞠る、5. 掉尾 (1 題 20 点、解答は『北の言語』「あとがき」を見よ)。

5. 先生の「神」は皆の「神」

先生も神であったが、先生の神は“Sapir”であった。研究室に飾ってあったのはもちろん(?) 御家族の写真ではなくサピアの御真影である(先生がいらしてから最初の 1 年ぐらいは、先生の研究室で院生演習をやっていた覚えがある)。先生は「サピアの Language (1921) はまず 7 回以上は読まなアカン、読むたびに新たな発見がある」と言っていた。オレも外大で 30 年も演習の授業に使っているが、確かに毎度発見がある。先生のことを思い出す時、その後ろにさらにこの巨人が立っているのを感じるのである。この拙文を書いている先輩の佐藤さんが「E. サピア『言語』：一般人にも読みやすく、しかもいつまでも古びない広さと深さを持つ言語に関する本はこれにとどめを刺す」と書いているのを見つけ、我が意を得たりと思うとともに「読みやすい、かなあ!？」とも思うのだ。すでにまえがきや 1 章の 1 ページ目から、まじめに読むととても読みやすいなんて言えない。この本が出たのはサピア 37 歳の時(つまり書いたのはそれより前)で、奥さんの入院代を払うために仕方なく書いたというから全くもって恐れ入谷の岸谷五朗である。先生はユアン・レン・チャオの『言語学入門』(橋本萬太郎訳、岩波書店)も薦めて下さったが、初学者の読者諸氏はその「訳者あとがき」を読んで著者にビビってから「まえがき」を読んでさらにサピアにビビるのもよいと思う。先生やサピアを思うと、オレなんかお釈迦様の掌で踊っているような気になる。いや、孫悟空とは不遜だ、先生の「あとがき」にも出てくる「螻蛄が斧を振るう」というやつだろうな。

1986 年、オレは 3 年生で言語学科に移行して来たばかりだった。来年から宮岡先生が来る、というのでまじめな先輩が「サピア勉強会」をしていた。当時は泉井訳の『言語』しかなかった。1986 年 7 月、北大「大滝セミナーハウス」に皆で出かけ、遠藤さんから生成文法を、宮岡先生からエスキモー語を習った。その時のレジュメが残っている。先生の赴任一年前なのに、なぜだろう？ 先生は当時集中講義で音声学をやっていたと思う(Smalley の Manual of Articulatory Phonetics (MOAP) を使って)。オレはその頃音声学は嫌いでまともにやった覚えがない。まさか音声学で東外大に採用されて 30 年以上も教えることになるなんて思わなかった。翌 1987 年 3 月の飲み会で先生は「4 月に赴任したら厳しくやりますよ」とおっしゃった。「先生、任せといて下さい！」この答えた方のセリフはオレではない、同期の中井君である。このやりとりはなぜか今でもはっきりと覚えている。

中井君はソシユール信奉者で、勉強会で一緒に『一般言語学講義』を読んでいた(フランス語で)。我が北大言語学研究室にはソシユールの写真が飾ってあったものだ。ある時に

先生と飲んでいて、オレは「先生の手紙に書かれている「言語の間の機能性」というのは、ソーシャルのいう忖度性が前提で、当然のことながら深い関係がありますよね？」と訊いた。すると先生は「ソーシャルというのは、あれはどれも好きになれんのか」と言ったのである。「好きになれん」で済みか！、人によりいろいろだなあと思ったものだ。

6. 先生の授業

院の1年生に入った時、先生の「言語学概論」の授業を受けた。中身の濃さとレベルの高さに「こりゃ院生のオレに丁度いいなあ、いや、それ以上だな～、学部の奴らはわかんのかな!？」と思った。その時の先生の手製のレジュメ（風間による書き込みあり）と、2コマ下のまじめな女子学生による丁寧なノートが保存してある。池上先生の言語学概論も活字になったので、これもそうなら良いのでは、と思う。

初回、文学部の一番大きな教室に行ってみると、溢れんばかりの学生がいてびっくりした。北大就任一年目、どうやら先生は厳しい成績評価によって大部分の学生を落としたらしい。「言語学概論」は文学部の学生にとっては必修なので、2年分の学生がいたのである。授業が始まると、これが蚊のなくような声である。一番後ろの席にふんぞり返っていたオレに、かすかに聞こえるかというお声である。ところが話が熱を帯びるにつれ、声はどんどん大きくなっていく。御尊顔は紅潮して鬼気迫る雰囲気である。そのボルテージも最高潮になろうという時、無情にも鐘が鳴り、先生は息を切らしつつ不服そうに授業を終える。その後も毎回この有様である。後で述べる最終講義もそうであった。

7. 学部の演習

「言語学演習」の授業はたしか14:30とか、4限の授業だからそんな開始時間だっただろう。しかし先生が来るのはだいたい3,40分後の15時過ぎである。終わるのは19時前後だったと思う。今なら先生が30分来なきゃ休講であり、授業時間を2分でも3分でもオーバーすれば苦情を言われる世の中だ。このテのことが許されたのは20世紀のうちまでではないだろうか。カリスマ教授、というのも宮岡先生が最後じゃないかと思うのだ。

17時ともなれば「アルバイトですのでここで失礼します」などという学生も現れる。すると（私と違って横に広い）先生の額にはマンガでよく見る＃マークのように血管が浮かび上がり、御機嫌斜めとなる。誰かが酷い訳でもしようもんなら気まずい沈黙の後、本格的なお怒りの時間となる。

学部生たちはこれを畏れ、前日には「演習のための」勉強会」なるものが開かれるようになった。有名なポイントはいくつかある。第1条は「perhapsを「たぶん」と訳してはならない、「ひょっとすると」とすべきでprobablyが「たぶん」である。第2条「接続詞「また」は非論理的であるので極力使ってはならない」、第3条、、今自分の学生に向かってこれらを口にしながら、受けた影響の大きさに心中苦笑することしばしばである。

演習の内容はほとんど「英文でサピアを読む」ことに決まっていた。日付を書いておいたので（我ながら偉い！）、当時何を讀まされたのかわかる。見て行くと19874月: Language (1933) / 19875月: The history and varieties of human speech. / 19875-6月: The unconscious patterning of behavior in society. / 19877月: The grammarian and his language. / 19878月: Sound

patterns in language. / 1987 9 月: The psychological reality of phonemes. / 1987 10 月: The status of linguistics as a science. / 1987 11-12 月: Language as a form of human behavior. / 1988 1 月: Language and environment. / 1988 1-2 月: Speech as a personality trait. / 1988 4-7 月?: Time perspective in aboriginal American culture: A study in method. / 1988 7 月: The concept of phonetic law as tested in primitive languages by Leonard Bloomfield. / 1988 10-11 月: Edward Sapir and Athabaskan linguistics. (by M. Krauss) / 1988 11 月 -: Sapir's synchronic linguistics. (by M. Silverstein) / 1990 2 月: Review of C.C. Uhlenbeck: Hat Passieve Karakter... / 1990 6 月: The problem of noun incorporation in American languages. / 1990 10 月: American Indian grammatical categories. / 1990 11 月: The relation of American Indian linguistics to general linguistics. お陰様で英文が少し読めるようになった。当時を知る者たちにとって Silverstein あたりは懐かしい名前であろう。上記のラインアップを見てから「サピアの言語学」『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』605-614 を読むと思う、オレたちの苦労はこの原稿を書くためだったのか!? 学部生に読ませるのはなかなか極道だ。いや、猫に小判と言うべきか。

1987 年の GW 明けまでに上記の Language (1933) の要約を作って出せ、と先生に言われたがサボってやらなかった。今も何か忘れ物のように感じている。「いつ怒られるかしら」と思いながら過ごしていたが、結局怒られなかった。課しておいて、お忘れになったんだらうか。今見ると読んだ形跡はある。しかし 1921 年の Language との違いを味わえる日はオレには来ないだろう。

このように有無を言わず読まされるままに、大量にサピアを読んだ。一方でオレは佐藤さんに倣って田中利光先生のブルームフィールドの演習にも出た。こちらは真逆で、学生の質問でもあれば田中先生は慎重に考え答えて下さるのだが、場合によっては考えすぎちゃって深い海に沈んでしまうのであった。ある時など 1 回の授業で 1 行しか進まなかった。これにも面食らった。いずれにせよ学ぶべきものは「学問に立ち向かう姿勢」とでもいうべきものだったんだなあ、と今にして思うのである。

8. 先生と試験

演習といえば忘れられないのはあの時のことだ。「先生は御都合で出かけられているので今日の授業はテストです」という。今回探してみたらあっさりそのテスト本体が出てきた。「62 (1987) 年 11/24」とある。時間は無制限だったんだらうか?、配られたのは Sapir の Language 1921 の Chapter IX How Languages Influence Each Other の全文で、次のように記されていた。

SEMINAR IN LINGUISTICS: EXAMINATION

Academic integrity is expected of all students of Department of Linguistics, Hokkaido University, at all times, whether in the presence or absense of a member(s) of the faculty. Understanding this, I declare I shall not give, or receive any unauthorized aid in this examination.

SIGNATURE OF STUDENT _____

The only authorized aid: English(-Japanese) dictionary

A. Put into Japanese: A-1: (省略) A-2: (省略) A-3 (省略)

B. Point out and correct a misprint on page 202.

C. Explain in 400 characters (Japanese) what is meant by “contrastive perspective”

D. Summarize in 1,000 characters (Japanese) Sapir’s main point as raised in this chapter.

極めつけはなんといっても問題 B である（オレはできなかった）。正解は Had English evolved a new future on the model of the synthetic future in French **or** had it borrowed from Latin and Greek their employment or reduplication as a functional device (Latin *tango*: *tetigi*; Greek *leipo*: *leloipa*), we should have the right to speak of true morphological influence. の **or** が **on** である、というものであった。3 時間ぐらい格闘した挙句、「やってらんねえぜ！」と憤懣やる方なく全員で呑みに行った。1 コ下の女の子が帰る際に貧血で倒れてしまったのを覚えている。ちなみにオレの点数は 86 点だ（自慢!?)。

これを書いていてどうしても読みたくなり Sapir のこの章を読み返したが（日本語で）、言語接触についてこんなに鮮やかに過不足なく書けるヤツなんていないよな、と思う。

9. 院生演習

院試は試験の翌日に面接である。試験が終わり、野球部の同期にバッタリ会ったオレは呑みに行ってしまう、しこたま呑んでしまい、目覚めたら恵迪寮だった。「今何時!?, オレ今日面接なんだよ!」2 月の札幌なのに外套は「みねちゃん」に忘れて来たらしい。原生林や工学部の庭の雪の上にゲーゲー吐きつつ這いつくばって文学部に来た。面接では、なぜ狭母音で無声化、広母音で鼻音化が起きやすいか、なぜ表語文字というか、という昨日の試験についての御講義を頂き「フランス語の試験ができていないねえ」とか「何語をやるかは入ってから決めるのかね」などと先生はおっしゃった。こっちはとにかく顔を上げれば戻しそうだったので、「はあ」とか「ええ」とかしか答えられなかった。そうしてオレは院生になった（なんで!?)。

ところが卒業式の呑み会で津曲さんから「調査に連れて行くからツングースをやらないか?」と言われ、隣にいた佐藤誠君に「いいじゃないか風間!、やれよ」と言われ、ツングースをやることに決めてしまった。もすこし真面目に分析すると、中国語を熱心にやって卒論も朝鮮語のヴォイスで書いて、(同期の田子内真弓ちゃんの卒論のためにやった) 勉強会でモンゴル語もおもしろいと思っていたオレは、北米じゃなくてアジア側の言語がやりたくなったのである。オレは何も言われなかったが津曲さんは先生にさんざん文句を言われたらしく、「なんで学生が自分の意志で決めたことに文句を言われなきゃなんのか」とブツブツ言っていた。先生が私に読ませたのは Andrade (1933) *Quileute* である。先生はオレにクィリュート語をやらせたかったようだった。異なる世界線は消え、今やこの手にただ 1 冊、表紙に *Quileute* と書かれたコピーが残るのみである。

学期初めの院生演習第 1 回、というのが鬼門であった。のっけから先生の機嫌は悪く、「あんたらねえ、あんたら院生がちゃんとしなから学部生が…」と説教が始まる。初体験の時は何だかわからず、皆ただ凍り付いていたが、これが学期初めに繰り返されると通過儀礼のようになってきた。授業の時と同じで、お怒りのボルテージもどんどん増幅して行く。初めての時は 2 時間ぐらいに感じたが、もっと短かったんだろうか!? 例によって息を切らしながらやっと説教が終わり、先生の口から出てきた言葉は「それでは、、、授業を始めます」だった。今思うと、先生は学期が再開して会議に出たり授業をしなければなら

ないのが嫌だったに違いない。

オレが院に入った頃は、「京大ではこれを読んでいるらしい」と言って、いわゆる Shopen の三巻本を読んでいた。こんな風である：1987 前期: Comrie, B. (1981) *Language Universals and Linguistic Typology*. (この時まだオレは院生でなかったが、先輩のレジュメをもらった) / 1988 前期: Schachter, P. (1985) *Parts-of-speech systems*. in T. Shopen (ed.) / 1988 前期: Comrie, B. (1985) *Causative verb formation and other verb-driving morphology*. in T. Shopen (ed.) / 1988 前期: Anderson, S. R. (1985) *Typological distinctions in word formation*. in T. Shopen (ed.) / 1988 後期: Comrie, B. (1985) *Lexical Nominalization*. in T. Shopen (ed.) / 1988 後期-1989: Anderson, S. R. (1985) *Inflectional morphology*. in T. Shopen (ed.) / 1989? 前期: Nichols, J. (1986) *Head-marking and Dependent-marking Grammar*. / 1990 11 月: Sapir, E. (1915) *Noun reduplication in Comox*. つい今しがたも、複文を扱って修論を書こうという院生に「何がいいですか」と聞かれ、Shopen を薦めてしまった。あれから 40 年も経っているのに。

先生は集中講義や講演に数多く一流の研究者を呼んでくださった。おかげで M. Clauss, J. Leer といった海外の研究者はもちろん、上野善道、風間喜代三、松本克己、千野栄一といった当時名立たる先生方にも身近に接してお話を伺うことができた。コロナ後、Zoom も当たり前前の世となり、「集中講義」というものがほとんど行われることのなくなった現在、振り返ればありがたくも貴重な学びの場であった。

10. 先生とレポート

曜日は忘れたが、エスキモー語の授業は 2 限だった。徹夜マージャンしてからコンビニで立ち読みして時間を潰し、それから出たことを覚えている (1 回だけよ)。立ち読みした紡木たくの『ホットロード』に感動したのは覚えているが、エスキモー語の授業内容はさっぱり思い出せない。最低の学生である。隣では一ノ瀬さんが熱心に聞いていた。

こんなオレでもまじめに書いたレポートが 2 つ残っている。M1 の春休み、卒業旅行で『地球の歩き方 中国』片手に放浪する愉しみを知ってしまったオレは、『地球の歩き方 インドネシア』を買ってプロモ山行きを計画していた。しかし先生にレポートを課され、泣く泣くあきらめてそれを書いた。「アルタイ諸言語における主題を示す形式と条件等の従属節を形成する形式との形態的及び機能的関連について」という題だ。千野先生の「W と B の邂逅あるいはバッハの瞑想曲」(『注文の多い言語学』所収) をヒントに書いたものだ。今読むと、なんと最後にエスキモー語の *relative* と *connective* まで扱っていて、論文になりそうな出来である (またも自慢!)。その後ある日、レポートにコメントを下さるというので行くとなぜか中央食堂の喫茶店 (初めてに入った) に連れて行かれた。とにかく覚えているのは、貶されもしなかったが褒めてもくれなかった、ということである。もう 1 つのレポートは「エスキモー語の用言複合体及びポストベースについて」で、こっちはいくつもアイデアが含まれているけれど今読むとまるで一貫性がない。2016 年になって、「モンゴル語、ツングース諸語、エスキモー語の 3 者における類似点と相違点について」『北方人文研究』9 などというものを書いてしまった。幸か不幸か、先生の目に留まることはなかったようだ。しかしオレには確信がある、たとえ読んでも貶しもしないが決して褒めてもくれないだろう、と。

11. 北方言語研究者協議会と『北の言語』

修士 2 年目の冬、天安門事件でオレのフィールドは中国からロシアに代わり、足掛け 4 ヶ月もロシアに行っているうちに早や修士も 3 年目、その 5 月に開かれたのが第 2 回北方言語研究者協議会（上述）である。

河野先生にお出ししたお茶が玉露でなかったといって、助手が大目玉を喰っていた。別の時だが、助手を一年間務めた切替さんは「あれはヤクザやでえ、ホンマ！」と言っていたものだ。オレはオレで、コピーの仕事を仰せつかったが「こっちの方が美的にいいんじゃないか」と真ん中をずらしてコピーしてしまい、先生の激怒を買った。「あのアホにはまかせておけない」ということで、誰かがやったはずだが本当に申し訳ない（今謝ってどうする!?!）。

協議会も何とか終わり、研究室で祝杯を挙げた時のことだ。最初に先生のご挨拶がある。千野先生や河野先生に久しぶりに会って、そして現在の北大でのしんどい自分を顧みたのか先生はこう切り出した「いや私にとってはね、外大にいた時が一番良かった…」と。「しかし今は北大言語の大將、野球で言えば監督みたいな立場じゃないか、それはないだろ！」と思った。自分の心には正直な先生であった。でも先生御自身はたいへんな我慢をして「10 回に 9 回は私はならぬ堪忍をしている」と思っていたに違いない。

協議会での各々の発表は、その後の『北の言語』の各章となる。表紙の地図を書いたのはオレだ。先生は「(バンクーバー島の南の) コロンビア川、これが重要だから必ずこの川を入れて地図を描け」とおっしゃった。その頃オレは「札幌日本語学院」という日本語教師養成学校でバイトしていて、「言語学概論」「日本語の歴史」「日本語文法」「日本語の語彙と意味」などを教えるようになっていた。何しろ「人に教える」というのは勉強になる。お金ももらえるが日本語学もおもしろく、モチベーションが大きいのですっかりハマってしまった。日本語の活用と動詞複合体を勉強しては書き直して「第 11 章 接尾型言語の動詞複合体について：日本語を中心として」を先生の所へ持って行く。無残なまでに真っ赤に直され、1/3 程に削られ注文を付けられ、また書き直しては削られ圧縮され、また書き直しては、、を繰り返した。最後は密度の濃い 18p. となった（その割にはひどい誤植が 1 カ所ある）。しかしこれは勉強になった。東外大に赴任すると、ある先生に「おまえの採用はアレに感心したからだ」と言われた。

日本語について書いているうち、先生に「東京の早津先生に御意見を伺いなさい」と言われた。そんなある日のことだ。助手や院生の面々が大学に来てみると先生は朝から大激怒である。「風間君はまだ来んのか！」と、怒りの矛先は手当たり次第に近くにいた者を襲った。どうも前日「早津先生宅の留守番電話などというものに風間がメッセージを残す」という不敬を働いたのが原因らしい（とぼっちりを喰った皆様すいません、と今頃謝ってどうする）。そんな日に限ってバイトか何かで、オレが研究室に行ったのはもう夕方だった。怒り疲れた先生の声はもう潤れていた。

この当時はよく『言語学大辞典』のゲラを読まされた。先生の「北米インディアン諸語」も読んだし、術語編の河野先生の「言語類型論」も読んだ。「トンカワ語」「サイウースロー・下ウムプコア語」「コモックス語」も読んだ。外大から先生を慕って追ってきた学生たちの「内蒙古チャハル方言における ɿ 音について」や「中国語閩南方言の音韻体系」も読

んだ。今自分の研究に占める河野先生の「アルタイ型言語」類型の影響の大きさを想う時、なんて良い勉強をさせてもらったものかと思わずにはいられない。

そうこうするうち4年目となり、放校処分に怯えつつ何とか修論を書き上げた（オレのせいで後輩たちは皆修士に4年掛かるようになった、この場をお借りして謝罪申し上げる）。運よく鳥取大学日本語日本事情講師に就職も決まり、先生に報告しに行った。祝って下さると思ったのだ。ところが先生は「それはねえ、いいのか悪いのか、、、そうですか」と言ったのだ。社会一般にはあまりまともなことではないとオレは思う。今なら少しわかる。博士に行ってもう数年、しっかり勉強した方が幸せだということだろう。しかしなあ。

12. 科研「環太平洋の「消滅に瀕した言語」に関する緊急調査研究」

その後、オレは先生とはやや疎遠になり、年に1,2度研究会でお会いするぐらいになった。Languages of the North Pacific Rim, Volume 1は1994年、その後1997年の3号から和文の『環北太平洋の言語』も出るようになり2010年の15号まで続いた。オレは1-2, 5-6, 10号以外は寄稿させてもらった（15号には2本）。津曲さんによれば、先生はこの刊行物はこれで終わらせたいと言ったのだそうだ。結局『北方言語研究』となり、現在に至る。

一方で「環太平洋の「消滅に瀕した言語」に関する緊急調査研究」（1999-2003）が始まった。科研のHPによれば、研究分担者8人、配分額2億86,90万円である。2000年度から始めた刊行物（ELPR）の出版は合計116点（121冊、平均248.2頁）に達したという。内訳は南太平洋班9点、北太平洋班48点、東・東南アジア班16点、日本班25点、理論情報処理班12点、総括班6点。内容別にみると語彙18点、テキスト39点、文法18点、論集24点だそうである。ここでもオレはもっぱら恩恵に預かり、テキスト5点、語彙集1点を出版してもらった（しかも全冊CD付きで）。『ナーナイの民話と伝説6』はCD8枚付きである（中西印刷の社長が自慢していた）。貢献度1/20ともいえる。さらにウデヘ語のテキストを出したいと先生に相談して断られた。2004年6月19日、学芸大で開かれた言語学会の昼休みに先生と講義棟の外に腰かけて話した。ひどく蒸し暑い日だったのを覚えている。

日本言語学会HPには1994年度に危機言語小委員会が設置され土田滋氏を委員長としたとある。当時の『言語研究』編集委員長は宮岡伯人氏だそうだ。2009年度、選挙で新会長が選出され、言語学普及検討小委員会の答申を受け、危機言語小委員会を解散し、「言語の多様性に関する啓蒙・教育プロジェクト制度」が新設されることとなった。この時にオレはその新会長に呼ばれ、他の少数言語研究者とともに上記の変更についての同意を求められた。その意図はわかっていたがオレは新会長に「やはり危機言語の研究が大切だ」と言い張った。

13. 最終講義

2000年3月13日京都大学文学部新館第3講義室にて、小冊子『「語」についての断想 自然言語における「結節」』（正誤表付き60頁）が配られ、最終講義は始まった。例によって小さな声は徐々に熱を帯び、3時間に及んだ。最後に先生は「私の研究はやっと今日から始まる」というようなことをおっしゃって、聴衆たちを驚かせた。『語とは何か』の「あと

がき」には「そのときお断りもしたように、中身は筆者の「最初」講義にすぎなかった」と書かれている。懇親会では外大時代の同僚原誠先生が「語とは何かなんてわたしや考えたこともありませんよ、スペースで区切られているのが語だと思っていますからねえ」と挨拶した。

その後この研究は御存じのように『「語」とはなにか・再考』へ続く。『言語学大辞典 術語編』1458-1459「サピア」によれば「サピアは、若い頃はユダヤ教に反発していたが、晩年はタルムード（ユダヤ律法大成）の民俗学・言語学的研究に打ち込んだ」とある。「言語研究者は晩年母語の研究に立ち返るものだ」と言ったのは先生だったのだろうか!？、その記憶が定かでない。

14. 「宮岡文庫」と晩年

その後久々にお会いするとお顔の皺は増えて行っただが、鋭い眼光に変わりはないと思っていた。オレは自分の出した本を送り、年賀状を送りしていたが、先生からは時折突如として電話が掛かってきたりした（まあ電話というのは突如掛かってくるものだ）。2019年、先生の言語学関係の蔵書を東外大語学研究所に寄付して下さるということになり、中川裕さんと2人で「宮岡文庫」を創設することになった。2020年3月1日に先生をお招きしてシンポジウムを開くことになり、ポスターを貼るまでに至っていた。しかしコロナ禍のため中止、翌2021年4月25日にZoomで開催することになった。先生の選んだ開催案内送付先の50人は、全く意外な顔ぶれだった。神戸の先生の御自宅に千田さん、黒木さんが伺ってZoomの設定をしてくださった。東外大の会場では宮岡先生の講演の後、下地理則、江畑冬生、峰岸真琴による講演が行われた。語研の所長だったオレは開会挨拶で先生の紹介をするという荣誉に与かった。御講演の題目は「活用」について一春庭は『八衢』でなにを発明（発見）したのか」である。レジュメも10頁にわたるものだったが、注目すべきは「1. 要点」「2. 語基と活用のまとめ — 口語五段活用」のあと、「3. <参考資料> 姿かたちの日本語文法小見—低きところから」というのが始まって、その中は9つの章に分かれた目次のようにになっている。例えば第七章には「類型的にみた日本語: 「語」の形態的手法と統合度」という章題のもと、魅力的な目次が並んでいる。先生はもう1冊出す予定だったのだ！この原稿はどこまで残っているんだろうか!？

その後はまた何度か電話をいただいたが、最後の方は話すのも苦しそうで電話越しに息遣いだけを聞いていた。「お見舞いに行かなきゃな、今度の学会は関西だしどうしようかな」と思ったが、行かなかった。冷たい弟子である。何も知らずにいつものように年賀状を出してしまった。

年明けに、2023年11月29日に逝去されたことを知った。

（かざま・しんじろう kazama@tufs.ac.jp）